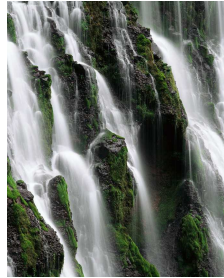


ついでに旅



「来春は屋久島に行きましょーや」

Hさんがおもむろに切り出したのは昨秋のことだ。一昨年には夫婦の高千穂登頂を企画して下さって、山頂で風雨に遭遇したきつい思いも懐かしくなってきた頃である。

Hさんは夫の同級生で、旧制中学最後の入学生である。中学が高校に変わり、四年間最下級生のまま六年間同じ学校に通った。終戦後の混乱や物不足も特別の体験となった。郷里は異なるが私も同じ年代である。

K銀行から別会社の重役に移り、まだ現役で働いているHさんとは異なり、定年で東京から鹿児島に戻った私たちは、ボーナスのない年金生活、全て予

定は前もって立て、それぞれ積立てておかなければ何も出来ない。しかしそれ故にそれは待ち遠しいものとなる。

スケジュールなど一切はHさん任せ。当初の予定ではレンタカーで回る筈だった。それが彼のK銀行時代の後輩が支店長ということで、連絡したところ、単身赴任の支店長は、月一回は市内の自宅に戻られるが、当日は島に居るので、私たちを案内して下さいといいます。これがつきの始まりである。

船上から見た屋久島は、巨大な山塊がお風呂に入つて頭の先を出しているような感じがする島であった。要するに裾野が無くて斜面がそのまま海に立っているのだった。

高速艇が宮の浦に着いたのは正午で、出迎えて下さった支店長の第一声は、

「お天気がよくて何よりでした。こんな上天気はこちらでは滅多にないんです。」

というものだった。ついでに旅なのだ。

湿潤のもたらす緑が陽光を浴びて輝き、生あるも

の喜びを鳥全体が謳歌していた。

お客さんの接待に何回も鳥を巡ったたであろつ支店長の手際よい案内で、松峰大橋、紀元杉、屋久島ランドと感動しながら見回つた。野生の猿や鹿に出会え、うぐいすも啼いた。ついているねと支店長に言われた。

縄文杉までの行程はとても無理とのこと、荒川のトロッコ道の入り口まで案内してもらつた。恐ろしいと聞いていた橋も

「祖谷のかつら橋に比べれば何でもない」

とたつたつと渡ると、テレビだろつか撮影隊がたむろしていた。声をかけて先に進むと岩のトンネルの先に材木の上に四五人を乗せたトロッコが見えた。かけ寄つて一緒にカメラに収まつてもらつた。と、その中に支店長がなかなか挨拶出来なかつたという「愛林」の社長がいらつしやつたのだ。滅多にないタイミングだった。支店長のうれしそうに顔に私たちも幸せ気分になる。

夕食は私たちが支店長を招待して、首折れ鯖など

海の幸を満喫した。タクシーで宿に戻ると、運転手が

「今日のような上天気のアとは、必ず一雨あるよ。曇りのほつが長続きするんだ」

という。H夫妻の話では、夜半雷光が点滅して、大雨が降つていたとのことだが、私たちはすぐに熟睡してしまつて何も知らない。

翌朝は霧がたちこめていたが、やがて晴れてきた。海中温泉、王古の滝、カジユマル、千尋の滝、など巡つていただいた。そして想像をはるかに越えた雄大な大自然に、ただ感動し続けた。日本にもこんな所があるんだ、しかもそれが鹿児島県にあるのだ。最終のトッピーに乗つて島に別れを告げる崖壁で手を振るTシャツにGパン姿の支店長は、青年のように若々しく見えた。

鹿児島新報 日曜随筆 掲載